宮本百合子
佐多稲子集

現代文学大系

現代文学大系38　宮本百合子　佐多稲子　集

昭和三十九年三月十日発行

著　者　宮本百合子　佐多稲子

発行者　古田晁

発行所　株式会社筑摩書房
東京都千代田区神田小川町二ノ八
電話東京二九一―七六五一（代表）
振替東京四一二三

装　幀　真鍋博

本文用紙　三菱製紙株式会社
表紙クロス　東洋クロス株式会社
本文整版　株式会社精興社
本文印刷　株式会社精興社
製本　株式会社鈴木製本所

宮本百合子集　目次

二つの庭　五
風知草　一九四

佐多稲子集　目次

素足の娘　二三九
灰色の午後　三五六
年譜　四六〇
人と文学　中島健蔵　四七六

口絵写真撮影　田村　茂

井上清司

宮本百合子集

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

風知草（一）

宮本百合子

大きな実験用テーブルの上には、たくさん無数の試験管。ビーカア。フラスコ。ふたつきの容器（ガラス棒のつってあれたよいの）（七月の頃に書んだ）（何というよ）（なお）ののせられてゐる。名前の、そして何に使はれ

二つの庭

一

隣の家の篠竹が根をはつて、こちらの通路へほそい筍を生やしてゐる。そこの竹垣について曲ると、いつになく正面の車庫の戸があけはなされてゐた。自動車の掃除最中らしいのに、人の姿はなくて、トタン張りの壁に裸電燈が一つ、陰気にぼんやり灯つてゐる。

仲子はけげんさうな顔で内玄関へ通じるその石敷道を歩いて行つた。すると、ゆづり葉の枝のさし出た内庭の垣の角から、ひよつこり江田が姿をあらはした。おさがりの細かい格子のハンティングをかぶつて、ゴム長をはき、シャツの腕をまくり上げた手に大きいなめし革の艶出し雑巾をにぎつてゐる。江田は、仲子を見ると、

「や、いらつしやいまし」

ハンティングをぬいで頭を下げた。

「こんにちは。――手入れ？」

仲子はきいた。

「はあ。お留守のうちにすこし念入りにやつて置かうと思ひまして……」

「けふは、事務所ぢやないの？」

「ゆうべの急行で山形へお立ちになりました」

「あら！　さうなの――」

仲子は、がつかりした声を出した。

「けふは、お父様のお誕生日だつたのよ、だからと思つて来たのに――」

江田は、

「それや知りませんでしたな」

律気者らしく仲子の失望した顔を見た。

「奥様はおいでですよ――お客様のやうですが……」

「どなた？」

「さア……越智さんだと思ひますが――」

駒沢の奥からここまで来たことが一層つまらなく思はれた。ハトロンに包んだ花を下げたまま、仲子はしばらくそこに立つて、江田が小型ピインの手入れをするのを見てゐた。しばらくすると、江田が、

「仲子さま、ともかくお上りんなつたらいかがです、そのうちにはお客さまもすむでせうから」

といつた。

「和一郎さんたちはゐるのかしら」

「保さんがおいでです」

仲子は、まはり道までして買つて来たバラの花を飾る場所を失つた心持で内玄関から上つた。左手のドアがきつち

りしまつてゐる。そこは客室であつた。いつもは華やかなよく響く調子で客と応待する母の声が、けふはひとつも外へ洩れて来ない。不自然な気分で、伸子は廊下一つへだてた食堂の一方だけあいてゐるドアから入つた。

寂びた赤うるしで秋の柿の実を、鉄やいぶした錫で面白く朽ち葉をあらはした火鉢に鉄瓶がかかつてゐた。炭がきれいにいかつたまま白くたつてゐる。部屋の気配は、ここにもう長い間坐つてゐるひとがなかつたことを感じさせた。

女中が出て来て、

「いらつしやいまし」

よそのお客へするとほりのお辞儀をしてお茶をいれた。

「お父様山形なんだつて？」

「さあ……」

伸子が名もはつきり知らないその女中は、主人のゆくさきを知らないのは自分の責任ではないといふ風に、からだをよぢつた。

「ゆうべ、お立ちになつたことはなつたんでせう」

「はあ……」

「まあ、いいわ、ありがたう」

畳の上に絨氈をしき、坐つて使ふ大テーブルを中央に据ゑてあるその部屋は、半分が洋風で片隅に深紅色のタイルをはつた煖炉がきつてあつた。その煖炉の左右は、佐々ごのみで、イギリス流の長椅子になつてゐる。その上に、どてらが袖だたみのままおいてあつた。それは、父のどてらであつた。

伸子は、ハトロン包みの花をもつて風呂場へ行つた。洗面器へ水をはつて、ハトロン紙につつまれてゐるままのバラの花をそこへつけた。それから壁にとりつけてある鏡に向つて、髪をかきつけた。

単純なその動作を終ると、伸子はたちまち次には何をしていいのかわからないやうな、とりつき場のない当惑にとらはれた。越智が来てゐる客間へは、どうにも入つていけないものがある。保のための家庭教師、高等学校へ入る試験準備の間、指導してもらつた若い教育者である越智圭一は、はじめのうちは佐々の家庭にとつて、みんなに一様の越智さんであつた。勉強するときのほか、越智は食堂で雑談したし、客間で画集を見たりしてゐる越智のまはりに、保も稚いつや子も出入りしてゐた。

保が東京高校へ入学したのは、前年の春であつた。その夏、若い越智夫婦が田舎にある佐々の家に暮し、伸子はあとからそのときの写真をみせられたことがあつた。大柄の浴衣をきて、なめらかな髪を真中からわけて結び、やせがたで憂鬱な情熱つぽい純子といふ夫人が、白服できちんと立つてゐる越智と並んでうつつてゐた。夫人のからだにあらはれてゐる、しめつぽくて、はげしさうな表情も、越智の白い夏服の立襟をきちんとしめて、とりすましたやうな工合も伸子の気質の肌に合はなかつた。普通にいへばよく似合つてゐる縁無し眼鏡も、寸法どほりにきまつて、ゆと

りと味はひのない越智の顔の上にかかつてゐると、仲子は本能的に自分が感じてゐる彼の人がらの、しんの冷たさや流動性の乏しさを照りかへしてゐるやうに思ふのだつた。

そのスナップ写真を伸子と顔をよせあふやうにしてしげしげ眺めながら、多計代が、

「伸ちゃん、お前、純子さんてひとを、どう思ふかい？」

ときいた。伸子は、そのとき、母の唐突な質問に困つた。

「だつて、わたし、このかたにまだ一遍も会つてゐもしないのに……」

「それやさうだけれども、この写真をみてさ。伸ちゃんはどう感じるかつて、いふのさ」

伸子は、さういふ多計代の詮索を、苦しく感じた。伸子は、恋愛の思ひを知つてゐた。結婚した夫婦生活の明暗もある程度はわかつてゐる。いまは女友達とひとり暮しをしてゐるけれども、伸子は母のききかたに、女としての感情の底流れを感じ、それは成長した娘としての伸子の心に苦しいのであつた。

「旦那さまが好きらしいし、ある意味で美人だし……問題はないぢやないの」

「問題になんかしてゐるんぢやないけれど……」

多計代は、ふつさりとして大きい、独特に古風な美しさのあるひさし髪を傾けて、なほ写真をみてゐたが、

「純子さんて人は、をかしな人だねえ。時々ひどいヒステリーをおこすんだつてさ。越智さんが出かけようとすると出すまいとして玄関にはだしでとび下りて、格子に鍵をかけてしまつたりするんださうだよ。まるで気違ひみたいになるときがあるんだつて」

誰から、どんな風に多計代はさういふ話をきかされるのだらう。それを思ふと、伸子は夫婦の間のそんな話や、越智と多計代とが純子についてさういふ話をする情景そのものにいとはしさを感じた。

「自分の細君のことをそんな話しかたで話すなんて——お母様の趣味？　そんなこと——」

伸子は、肩でぶつかつてゆくやうにいつた。多計代は黙つた。そして、とりあげて見てゐた写真を、テーブルの下にある手箱の中へしまひはじめた。

一月ばかり前に伸子が来たとき、多計代は黒い瞳を機嫌よい亢奮でかがやかせながら、

「——越智さんは純粋な人だねえ」

といつたことがあつた。

「さうお？——どうして？」

うたがはしさうな伸子のききかへしにこだはらず、多計代は、

「僕が、もし純子と結婚してゐなかつたら、きつと奥さんに求婚したでせう、だつて——」

さういふ多計代のこだはりのない満足らしさが、伸子をおどろかした。

「だつて——」

ぢや、お父様はどうなるの？　伸子の心に声高くその反問が響いた。
「ありえないぢやないの……そんなこと！」
まばたきがとまつたやうな表情になつた娘をちらりと見て多計代は、
「だからさ」
といひ添へた。
「ただ、さうだつたらう、といふだけの話なのさ」
けれども、越智のある厚かましさが、伸子の胸に鋭く深くきり込まれた。多計代はさう感じてゐないらしいけれども、そんな越智の言葉は、母をほめてゐるやうで、ほんとは母も父も侮辱してゐるところがある。さういふ、越智に対する伸子の否定的な感情は、越智にも反映してゐた。母娘の間で意見が合はないやうなことがあるとき、多計代は自分の感情に重ね合はした憎々しさで云つた。
「越智さんだつてこの間云つてゐたよ。伸子さんといふ人は、破壊のために破壊をする人だつて——」
そんなとき、伸子は唇のふちが白くなつてゆくのが自分でわかつたほど激しい嫌悪にとらはれた。
客間のドアは、ぴつたりしめられてゐる。越智に対する伸子の批評に向つてしめられてゐる。伸子は、そのハンドルにかける手をもつてゐない自分を感じるのであつた。
心のおき場がなくて、伸子は保の勉強部屋へあがつて行つた。

二階の日あたりのよい畳廊下で赤いメリンスしぼりの蒲団をかけ、小さいつや子が、お志保さんに本をよんで貰つてゐた。背中をかがめて膝の上に支へた手の本をよんでいるお志保さんのうしろに伸子が現れると、
「ああ、お姉ちやまが来たア」
つや子が、いかにもその変化をよろこぶやうに声をあげた。
伸子は、つや子が病気だとは知らなかつた。
「どうしたの？　又ゼーゼー？」
末子のつや子には、喘息の持病があつた。
「二三日前雨がふりましたでせう？　あのとき学校から、ぬれておかへりになつたもんですから」
「なに読んでるの？」
「アラビアン・ナイトでございます」
つや子は、左右にたらした短い編下げの頭をふるやうにして、
「お姉ちやまア」
と伸子を見あげた。
「ここへ坐つて！　あつたかよ」
伸子は、ふとんと同じメリンスしぼりのねまきを着てゐるつや子を半分自分の膝によりかからせた。
「つや子ちやん、唐辛子、ぬいだんでせう？　だからゼーゼーになつたんでせう？」
よわいつや子は冬から春にかけて、いつも赤い毛糸でこ

しらへた下着をきせられてゐた。つや子ちやんの唐辛子は佐々の名物で、小学三年になつたつや子はそれをきまりわるがつた。

「僕、もう唐辛子きないでいいのよ、ずつと前ぬいだんですもの」

兄たちばかりのなかに育つて、つや子は僕、僕、といつた。蒲団のまはりに、南京玉の箱や色紙がちらばつてゐる。賑やかな日向の色どりの中につや子の稚い顔は蒼ぐろく小さかつた。

「大きいお兄さまは？　お留守？」

「うん」

「おかへりになりますでせう。飯倉へ御電話かけましたから」

お志保さんは、飯倉といふ響を何となし特別にいつた。その伯父の家には冬子と小枝といふ従妹たちがゐて、和一郎はよく泊りがけで行つてゐるのであつた。

「保ちやんは？　御勉強？」

つや子は、

「うん」

自分が学校をやすんでゐるつや子は声よりもよけいつよく合点して、首をすくめるやうにした。

「ちよいと保ちやん見て来るわ、そしたら、また遊びませう、ね」

同じ二階の北側に長四畳があり、そこが保の勉強部屋になつてゐた。襖をあけようとして、伸子は鴨居にはられてゐる細長い紙に目をひかれた。鴨居の幅きつちりに切つた白い紙にフランス風の線の細い書体をのばして Meditation と書かれてゐる。伸子は、はつきりしないおどろきに心の全面をうたれて、その一つ一つの綴りを辿つた。メディテーション。――瞑想――。かういふ字が、保の部屋の入口にはられてゐる。保が自分で書いてはつて、その内にこもつて勉強してゐる。どういふ意味なのだらう。不自然なこだはるもののある感じがした。高校の学生たちの生活、ものの考へかた、そして仲間同士の暮しかた、それは、保の貼紙の気分とはちがつたものに想像されてゐた。活気と若々しい野望と意欲とがむら立つて想像されてゐた。京大で社会科学研究会の学生が三十余名検挙されたりしてゐる頃であつた。伸子はさういふ事件の意味はわからなかつた、伸子の生活からも文学からもはなれたところにおこつてゐて、その意味のわからなさと激しさとで、伸子をいくらかおぢさせてゐることなのであつた。保の生活がさういふ学生の動きとはちがつてゐる。伸子はそれにたいして批評をもたなかつた。けれども貼紙の文字は伸子の本性に抵抗を感じさせ気にかかるのであつた。

「保さん、ゐる？　あけてもいい？」

伸子は、唐紙のひき手に手をかけてきいた。

「ああ、姉さん？　いらつしやい」

保は、勉強机に向つてかけ、ひろげた帳面にフランス語

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

の何かを書きうつしてゐた。北側の腰高窓があけはなされてゐて、樹木の茂つた隣の奥ふかい庭が見おろせた。梢をひひらせてゐる銀杏の若葉が、楓の芽立ちの柔らかさとまじりあつて美しく眺められる。

「いつ来たの、僕ちつとも知らなかつた」

保のまぶたはぽつてりとしてゐて、もみ上げや鼻の下に初々しい和毛のかげがある。

「さつき来たばつかり」

仲子は、ちよつと黙つてゐて、

「お客なの知つてゐるの？」

ときいた。

「ああ」

「おりて行けばいいのに……」

「——僕はこの間家へ行つて会つたばかりだから別に話もない」

保は、おだやかにいつて絣の袷を着た大きい膝を椅子の上でゆすりながら隣の庭を眺めおろしてゐたが、

「姉さん、けふ泊つて行くんでせう」

ときいた。

「さう思つて来たんだけれど……」

仲子のこころもちは、やがてどうきまるにしろ、今はとりつくはしを失つてゐるのであつた。

「ぢやあ僕、これだけしてしまつてもいい？」

保の勉強机の上には、学校での時間割のほかに、細かく一週間を区分した自分の勉強表がおいてあつた。

「どうぞ……ぢやあとでね」

自分のうしろに保の部屋の襖をしめてその部屋を出ながら、伸子は、広い佐々の家のなかに、自分が落ちつく場所といふものは一つもなくなつてゐることを痛感した。

二

心と体の居場所がなくて、あちこちをふらついてゐた伸子は、漂ひよつたやうに、古風な客間に入つて来た。榧や楓、車輪梅などの植ゑこまれた庭は古びてゐて、あたりは市内と思はれない閑寂さだつた。竹垣のそとで、江田がホースを使つてゐる水の音がきこえた。

くつぬぎ石、苔のついた飛石。その石と石との間に羊歯の若葉がひろがつてゐる。煤竹の濡縁の前に、朴訥な丸石の手洗鉢があり、美男かつらがからんで、そこにも艶々した新しい葉がふいてゐる。茶室づくりの土庇を斜にかすめて黄櫨の樹が屋根の方へ高くのびてゐる。

庭下駄の上へ、白足袋の爪先を並べてのせて、伸子はやや荒れてゐる客間の庭を眺めてゐた。

庭に一人向つてぢつとしてゐると、伸子には、佐々の家も、この数年に、随分変つて来たことがしみじみ感じられた。

変りかたは、眺めてゐる客間の庭の様子にも反映してゐた。伸子が幼なかつた頃の佐々の家は、家全体が茶室づく

りに按配されてゐた。門からの入口も、台所へまはる細い道も、風雅につつましかつた。それが、近頃、自動車をおくやうになつてから、門からの細道は石だたみとなり、車庫の位置によつて、台所への道がひろげられた。そのために、客間の庭の奥ゆきが何尺か削られた。もとは、石燈籠と楓、松などの植ゑごみの裏に、人一人とほれるほどの砂利じきのゆとりがあつて、ゆきとどいた庭のつくりであつた。それは自動車の道のためにこはされた。植木屋がそれにつれて石燈籠を前の方へもち出してすゑ直した。松の枝かげを失ひ、楓の下枝からむき出された燈籠に、納りをつけようと、無造作に青木が植ゑこまれてゐた。燈籠は、我からその位置を悲しむやうに、庭の真中へとび出て立つてゐる。

伸子の父は、建築設計家であつた。それだのに、どうして、こんな有様にしてしまつて、みんながそれに無頓着で平気なのだらう。それは、この地味な八畳の土庇のついた室やこの庭が、佐々夫婦のこの頃の生活気分から重要さと愛着とを失はれてゐることを意味してゐると伸子は思つた。

伸子が二十歳ごろ、まだこの家に娘として暮してゐた時分から、客室は次第に腰かける方がつかはれるやうになつた。水色と白の縞の壁紙がはられ、イギリス好みの出窓、その下につくりつけられた木の腰かけ。いかにも明治四十年代の初期に、その年代とおなじ年の日本の建築家であつた父が、使へる金のささやかな範囲で、自分の空想を実現したといふ工合の洋風客間は、柱も節のある質素なものであつた。若葉の季節になると、出窓のビードロ玉のやうなガラスが海の底にでもゐるやうに新緑の色を映すので、伸子の少女の心はその美しさに奪はれた。

パンヤ入りのクッションがところどころに置かれてゐたその室の調度は、年とともに、いつしか変つた。この節は佐々の陶器の蒐集棚が立ち、メディチの紋が象嵌してあるエックス・レッグスの椅子などが置かれてゐる。第一次欧洲大戦の後、日本の経済は膨脹して、全国に種々様々の大建築が行はれた。丸の内の広場に面する左右の角に、東京で最初の鉄筋コンクリート高層建築が出来た。佐々と今津博士との協同で経営された設計事務所でそれらの設計はつくられ、完成した。

伸子が二十歳だつたとき、父につれられてニューヨークへ行つた。そのことには、大きい背景として、さういふ当時の日本の経済のふくらがりと、建築家として父の活動場面の拡大とがあつたのであつた。二十の伸子は、それらの複雑な関係について何も理解してゐなかつた。自分としては、親の指図や干渉からはなれた暮しの中で、人間として育ちたい気持が一杯なだけであつた。ニューヨークで、佃といふ東洋語を専攻してゐた人と結婚した。唐突だつたその結婚も、伸子とすれば、一人立ちになりたいといふ一貫したその希望からであつた。伸子は、主としては母親が計画してゐる「よいお似合ひ」の社交的結婚を心から恐怖し

た。伸子が真面目に思つてゐる文学の仕事は、さういふ結婚生活からは生れない。そのことは、女である伸子には本能的にわかつた。同時に結婚しなければいつまでつづくかわからない「大きいお嬢様」の生活の苦痛ときまりわるさとは、十八歳からの二年間で、伸子は知りつくした。

伸子は、一昨年から女友達の吉見素子と暮しはじめた。佃との結婚はこはれた。いますんでゐるのは、駒沢だけれども、結婚してゐた五年間、おそろしいもがきのつづいてゐた間、伸子が佃とすんでゐた家から逃げ出して何日か、或は何ケ月かを過したところは、育つた佐々の家の中ばかりではなかつた。佃とわかれ、作品をかき出してから、伸子が第一に自分の机をおいたのは、老松町の路地の奥にある、あるお裁縫やさんの二階であつた。白い実のついた南天の根もとには、いつも小庭のかなたに、寺の松の枝が見えてゐた。毎朝早くから共同水道の水の音が響く界隈であつた。そして、夜更けて帰る人の下駄の音が、どぶ板に響いた。伸子は、そこの茶の間で、よく、細君がやいてくれる土佐の目ざしをたべた。奥の八畳にお裁縫に通つて来てゐる娘たちが五六人並んで針を運び、小声でおしやべりしてゐる。その二階で、伸子はほんとの生涯がこれから始まるこころもちで小説を書きつづけた。くたびれると、小夜着をかけて、火鉢のそばに横になつた。そんなとき伸子のからだの下にしかれるメリンスのきれいな大座蒲団は、素子がくれたものであつた。その二階へ、佃のところから伸子のもつてゐた本が送りこまれた。伸子は小説を書く収入で、素子はある団体の雑誌編輯をしてとる月給で、二人は共同の暮しをはじめたのであつた。

この二三年の伸子の生活のうつりかはりは、外からもわかりやすい変化であつた。ひとこま、ひとこま、生活の情景ははつきり推移した。その間、佐々の家も思へばずゐぶん変つたものだ。しかし、その変化は、大きい屋台の中で、いつとなし、あれやこれやの細目が変つてゐることにおどろかれる、さういふ変りかたなのであつた。

佐々は健康で生活力の旺盛な、働きずきの男らしい恬淡さをもつてゐた。メディチの紋章のついた椅子も、珍重してゐながら、大切になでさすつて、眺めるやうな味はひかたはしてゐなかつた。伸子も来あはせてみんながその室でしやべつてゐるやうなとき、泰造はちよつとその十五六世紀頃の椅子にかけてみたりした。

「昔の人間はよくこんな工合のわるい椅子で辛抱してゐたもんだね。これをみても進歩といふことは大切ですよ」

さういひながら、どういふ細工によつてか、ひぢかけの先の円くなつてゐる手前にくるくるとまはるやうにはめられてゐる繊細な輪細工を、乾いた軽い音をたててまはして遊んだ。ときによると、

「お父様のハムレットを見せて上げよう、アーヴィングの直伝だよ」

どてらをぬいで片方の肩からななめにかけ、そのエック

ス・レッグスにかけて沈痛に片肱をつき額を抑へた。そして誰でも知つてゐる "To be or not to be" といふせりふをいつた。丸まつちいからだの、禿げてゐる頭の丸いハムレットが、紺の毛足袋の短い足を組みあはせ、血色のよい、髭のそりあとの見える東北人らしい顔を傾けて To be or not to be と煩悶するのは、なんと滑稽なものだつたらう。伸子は手をうつて笑つた。

「オフェリアはいつ出て来るの？　お父様、オフェリアを出してよ、わたし出るわよ」

と、ふざけた。

「あいにくだが、ここまでをそはつたらアーヴィングのところへお客が来ましたよ。オフェリアは出ずじまひさ」

「お父様つたら！　でたらめばつかり！」

多計代が長椅子にかけて、をかしさうに更にそれよりもいら立たしさうに白い足袋の爪先を細かく動かしながら非難した。

「お父様つたら、なんでもかんでも茶化しておしまひになる」

悲壮な重々しい情熱を好む多計代には、ハムレットをさうやつて遊ぶ泰造の気分や、それをよろこぶ娘の伸子の気分が、人生へのまじめな感情にそむいたものと感じられるのであつた。

関東の大震災の後、復興のために自動車の輸入税が一時廃止された。

「買ふならかういふ機会だね」

遊びに行つてゐた伸子も、両親や弟たちに交つて、いろいろの自動車会社から出されたカタログを見た。

「多計代のハイヤー代だけでも相当だし、俺はどんなに能率があがるかわからない、……しかし、贅沢な車は駄目だよ、第一、門が入りやしない」

伸子の知らない幾晩かの相談の末、イギリスのビインが買はれた。小型の黒い地味なビインにふさはしく、小柄で律気な機械工出の運転手の江田が通ひで雇はれた。江田は一風ある男で、はじめて来たとき、お仕着せは絶対にことわつた。佐々のお古を頂きたい、と約束した。そして、お下りのハンティングをかぶつて、毎朝八時といふと、小柄の体をひどく悠然と運んで通つて来るのであつた。

いま、竹垣のそとにホースをつかつてゐる江田の姿を目にうかべ、伸子は思はず一人笑ひをした。父をなつかしむ笑ひをもらした。泰造は米沢に生れて、イとエの発音がさかさになることがあつた。字でかけばちやんと書いたが、発音では逆になつた。江田が運転手になつたとき、佐々は伸子に、

「運転手が、いい男でよかつた。イダつていふんだよ」

と教へた。伸子は井田といふのだと思つて、さうよんでゐた。

そしたら、あるとき、

「これを井田におやり」

と伸子にわたした祝儀袋の上に江田殿と書いてあるのを発見した。
「あら！　お父様、エダぢやないの」
「さうですよ、イダだよ」
「――……」
伸子は笑ひくづれるやうに、父の肩ごしに祝儀袋を見せた。
「これ、何ておよみになるの、お父様は……」
「イダさ」
これはしばらく佐々の家の一つ話になつた。とんちんかんなことがおこると、
「ホラ、イダだ」
と笑つた。
一つの家庭の歴史にとつて、自動車が出来るといふことは、生活全体に深い影響があることだつた。日本のやうにどの家庭でも便利のためにフォード一台もつてゐるのが普通といふのでない国では、一台の自動車は、それがどんなに見栄えのしない小型のビインであらうとも、自家用車をもつてゐることであり、そのことは便利以上の何ごとかをこの社会で表現することなのであつた。
江田をイダ君と呼び、どつさり車の集つてゐる場所で、江田がききわけやすいやうにと特別のサイレン風の小さい呼子をふきながら、佐々は朝から夜までの活動の環をますますひろげて行つた。

毎朝佐々を事務所へ送りとどけてから、その車をうちまでかへしてよこして、それから多計代が外出した。外出さきから多計代を家まで送りとどけて、又その車は事務所へ戻つた。自動車は珍しがられて、その一台が毎日多計代によつても使はれてゐた。けふは、今ごろの時間に、江田がのんびり車体の手入れをしてゐる。江田にとつても、たまにはほしいのどかな午後の気分であらう。
ひとりぼつち、客間の庭に不様にされて忘られかけてゐる石燈籠を眺めてゐると、この家の生活感情の推移が伸子の心にしみた。江田は律気な運転手の、古風な見栄のやうなものをもつてゐた。あるとき長男の和一郎のことを、江田が若様といつて伸子に話した。伸子は、自分の耳を信じかねた。この家に若様と呼ばれるやうなものがゐたのだらうか。伸子は、悲しさうに、江田さん、どうか和一郎さんと呼んでやつて頂戴、あんまりみつともないからね、といつた。そして、多計代にそのことを注意した。
「おや……さうだつたかしら……」
多計代はいくらかばつのわるい顔つきになつて、まつ毛の美しい眼をしばたたいた。しかしそれぎりであつた。江田のその呼びかたは続けられてゐる。伸子はそれを知つてゐる。
その半面、生活の営みには、自動的なやうな刻薄なやうなものが流れはじめてゐた。
さういふ家庭の推移のなかで、多計代の感情は越智に向

つて異常に傾きかかつてゐるのである。

沈んだ眼差しで、伸子が、杉苔の上にある西日の色を見てゐると、もう戸のしまつた車庫の角をまはつて御用ききの自転車が通つて行つた。女中部屋の格子窓のところで下りて、小声で何かいつてゐる若い男の声がした。すると、いきなり湧くやうにイヤーともキャーともきこえる女たちの嬌声がおこつた。若衆は大人つぽいのど声で笑ひ、更に何かいつて女たちを笑はした。笑ひ声は、自分たちだけの大つぴらな声であり、主婦なんぞは念頭にない声であり、呼ばれない限り無関心でゐることがあたり前になつてゐる生活の声であつた。伸子は一層執拗に、杉苔の上へ目をすゑた。

三

やがて豆腐屋のラッパが聞えはじめ、台所の出入りがしげくなつた。父の祝ひのためと思つて買つて来た黄色と白のバラの花を、伸子ははりあひの失はれた気持でカット・グラスの花瓶にさし、それを父のどてらが置いてある煖炉前の小卓の上に飾つた。

保が二階から降りて来た。そして、立つたまま、伸子が一人だけゐるその辺を見まはした。

「なあに？　おなかがすいた？」

「さうでもないけど……」

電燈の灯かげがそのガラスにきらめいてはゐるが、午後ぢゆうぴたりとしまつたままでゐる客室のドアを、こつちの室から保が見てゐる。伸子は保の気持がわかるやうでせつない思ひがした。

「――もうすむでせう」

保は黙つて視線をそらせ、煖炉前のバラの花を見た。いつもの保であつたら、すぐよつて行つて、その花の品種だの咲きかたのよしあしを話すのに、今夜は遠くから立つたまま眺め、ただ、

「姉さんがもつて来たの？」

ときいた。

「けふ、ほんとはお父様のお誕生日だつたのよ。知つてゐる？」

「うん」

保はしばらく立つたままでゐたが、また二階へあがつて行つた。

食卓の準備がはじまつた。それを見てゐる伸子の唇から思はずほとばしるやうな質問があつた。

「二人だけ別？　どうして？　お母さまは？」

「奥様はお客様とあちらであがりますさうです」

「……」

やつと自分を抑へた声で伸子は女中に命じた。

「けふは、お父様のお誕生日で駒沢から来たんだから、御一緒にたべられるまでお待ちしてゐます、つて。さう申上げて来て」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com